

令和5年度 学校経営計画に対する中間評価報告書

							石川県立金沢北陵高等学校	
重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	分析（成果と課題）	判定基準	備考
1 本校のスローガンである「時を守り、場を清め、礼を正す」を全生徒が意識し、自ら実践できるようにねばり強く働きかける。	① 時間厳守の指導を徹底し、遅刻・欠席者数の減少と皆出席を奨励する。また、登校指導等により挨拶の励行を推進する。	生徒指導 学年 各教科	令和4年度の皆出席者数は、学年平均で51人と前年度より微増したが、健康管理(感染症対策含)指導を継続する必要がある。挨拶は教職員から行うと返してくれる生徒が多い。	【成果指標】 (生徒) 皆出席者数の増加に努める。	学年あたり1年間の皆出席者数が A 80人以上であった B 60人以上～80人未満であった C 40人以上～60人未満であった D 40人未満であった	1学期期末試験終了時での皆出席者数は1年82名、2年86名、3年77名であった。数値としてはAないしはB判定となるが、健康管理の指導が必要であり、今後とも生徒の状況把握に努め、保護者と連携しながら、遅刻・欠席者数を減らす取り組みを継続する。	C、Dの場合、次年度の取り組みを再検討	毎学期調査
				【努力指標】 (生徒) (保護者) (教員) 生徒自ら進んで挨拶ができる。	自ら進んでの挨拶が A よくできている B だいたいできている C あまりできていない D ほとんどできていない	A+Bの合計が生徒92.9%、保護者90.6%、教員69.7%と、生徒や保護者の意識と教職員の意識にやや隔りがある。常日頃から生徒に挨拶の大切さを指導しており、元気に挨拶をしている生徒は多い。今後とも教職員も含め挨拶の励行に取り組みたい。	A+Bの合計が90%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	② 服装容儀の指導を徹底し、生徒の規律・マナーの向上を目指す。	生徒指導 学年	令和4年度は生徒・保護者の90%が遵守できていると回答があった。残り10%弱の生徒が制服の正しい着用やマナーを遵守できていない。	【満足度指標】 (生徒) (保護者) (教員) 様々な機会を捉え、服装・頭髪に関して注意を促し、自発的な規律・マナーの遵守に努める。	北陵生は頭髪・服装容儀やマナーなどについて A よく守っている B だいたい守っている C あまり守っていない D ほとんど守っていない	A+Bの合計が生徒93.3%、保護者89.1%、教員45.5%と、生徒や保護者の意識と教職員の意識に大きな隔りがある。就職等の進路を見据えて学年団と生徒指導課、さらに進路指導課との連携のもと、教職員の共通理解を図り、保護者にも理解を求めながら指導にあたりたい。	A+Bの合計が90%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
③ 生徒を注意深く見守り、面接や保護者との連絡をより密にし、生徒理解を深める。		生徒指導 学年	生徒理解に努めるとともに、個に応じたきめ細かな指導を行っている。	【努力指標】 (教員) 生徒理解を心がけ、生徒の不注意な行動の未然防止のための早期指導に努めている。	生徒理解に心がけ、不注意な行動の未然防止に努めている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない	A+Bの合計が93.9%という結果であった。教職員は、あらゆる場面において生徒の様子をよく観察し、生徒の変化をしっかりと把握している。また教員間で情報共有を図っている。今後とも教職員間の連携をいっそう強化して生徒理解に努めたい。	A+Bの合計が95%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
		保健相談 学年	いじめアンケートや面接を通して、生徒の状況をしっかりと把握し、相談や支援を行っている。	【努力目標】 (教員) いじめ等の早期発見、早期対応に努め、教員間での情報共有がなされている。	いじめ等の早期発見、早期対応に努め、教員間での情報共有がなされている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない	A+Bの合計が97%という結果であった。いじめに関し、情報交換会、学年会などを通じてさらに情報共有を行い、いじめや問題行動の防止に努め、予兆等問題点がないかどうか目を配るとともに、保護者との連絡・連携をより密にしていく。	A+Bの合計が90%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	分析（成果と課題）	判定基準	備考
2 研修等を積極的に受講し、教員としての資質向上を図ることにより、ICTを活用した授業改善を進めるとともに、生徒の学習意欲の向上を目指した取組を充実させる。	① 研修等を積極的に受講し、教員としての資質向上を図る。	教務 各教科	校内外の研修等に参加している教員は多く、資質向上につながるよう努めている。	【努力指標】（教員） 研修等を積極的に受講し、教員としての資質向上を図る。	教員の資質向上につながるよう研修等に A 積極的に取り組んだ B ある程度満足できる取り組みができた C 積極的な取り組みはできなかった D ほとんど取り組みなかった	今年度4月～8月までの間に、県教員研修センター主催等の研修に参加した教員は、のべ96名である。さらに校内研修として、若手教員研修、ICT機器を利用した授業におけるプチ研修会も開催されている。今後も教員の研修情報を共有できるようにし、受講しやすい環境をつくっていく。	A+Bの合計が90%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	② ICTを活用した研究授業や公開授業を積極的に行い授業の改善に努める。	教務 各教科	ICT機器を使用する教員は多く、さらに効果的な活用の工夫が求められている。	【努力指標】（教員） ICT機器の効果的な活用や工夫に努め、研究・公開授業・授業参観などを実施する。	ICT機器の効果的な活用に努めている教員の割合が A 80%以上である B 70%以上～80%未満である C 60%以上～70%未満である D 60%未満である	A+Bの合計が84.9%であった。昨年度同期の81.4%から3.5ポイント数値が上がり、過去5年の間では最高値であった。全生徒に一台ずつ端末が配付されたことにより、さらにICT機器を効果的に活用した授業を積極的に取り入れている教員が多くなっている。	70%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	③ わかる授業を行うとともに、生徒の興味・関心を引き出す授業の工夫・改善に努める。	教務 各教科	生徒の発言や活動を促す授業展開を図るよう、授業の工夫が必要である。	【努力指標】（教員） 互見授業を実施し、生徒が意欲的に学習に取り組めるよう授業改善に努める。	生徒の発言や活動を増やす授業の工夫に A 積極的に取り組んだ B ある程度満足できる取り組みができた C 積極的な取り組みはできなかった D ほとんど取り組みなかった	A+Bの合計が81.9%、昨年度中間より（81.5%）より0.4ポイント数値が上がった。ただ判定基準を下回っていることから、後期の授業において今求められる学力観に基づき、さらなる工夫の必要性がある。	A+Bの合計が90%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	④ 家庭での学習習慣の定着を図る。	教務 進路指導 学年 各教科	考査試験前は勉強に励むが、日常の学習時間は減少している。今後も適切な学習課題を与え、習慣化させる必要がある。	【成果指標】（生徒） 自主的な学習を継続的に取り組むことができた。	家庭での平均学習時間が A 90分以上である B 70分以上～90分未満である C 55分以上～70分未満である D 55分未満である	第1回調査結果はA+Bの合計、平日52.8%、休日76.5%、試験前77.9%となっており、判定基準は超えている。試験前は家庭学習は増えるものの、平日については少ない傾向が見られる。ICTを利用した課題を提供するなどして、家庭学習の定着に努める。	A+Bの合計が50%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	年7回調査

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	分析（成果と課題）	判定基準	備考
3 「自分を知り、社会を知り、将来の自分を考えること」のできる生徒の育成に向け、キャリア教育の一層の推進を図る。	① 各学年に応じた進路学習を工夫し、主体的で継続的な学びができるように支援する。	進路指導 教務 学年	多様な進路希望に対応するために組織的な指導体制と生徒一人ひとりに対するガイダンス機能の充実が求められる。	【努力指標】（教員） 生徒が自らの適性を理解し、進路目標をより明確に定めることができるよう、少しでも多くの個人面談を行う。	担任と生徒との1年間の個人面談回数が A 6回以上 B 5回以上 C 4回以上 D 4回未満	1学期中、個人面談回数は概ね3回行われているが、回数はもちろんのこと、その質が求められる。学年団等と連携しながら、生徒理解と進路目標をより明確に定めることができるよう面談を継続して行う。	C、Dの場合、次年度の取り組みを再検討	7月、12月2月末に調査
				【満足度指標】（生徒） 進路指導の行事や「産業社会と人間」・「総合的な探究の時間」の学習が進路を考える上で A 大いに役立った B ある程度役立った C あまり役立たなかった D まったく役立たなかった	進路指導の行事や「産業社会と人間」・「総合的な探究の時間」の学習が進路を考える上で A 大いに役立った B ある程度役立った C あまり役立たなかった D まったく役立たなかった	A+Bが93.1%であり、一定の成果が得られたと考える。1年次生は次年度以降の系列を選択するにあたり「産業社会と人間」で実施したガイダンスや面談・校外での見学など参考になったものと思われる。2年次生もインターンシップに向けた事前学習をとおして、社会人として求められる力などを考えることができた。	A+Bの合計が85%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
				【成果指標】（生徒） 進学志望の生徒が第一志望校に合格することをより重視する。就職については、早期に内定率100%となるよう指導する。	四年制大志望者のうち第1志望校に合格した生徒が A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満 学校推薦による就職希望者について、 A 10月末で100%内定を達成 B 11月末で100%内定を達成 C 12月末で100%内定を達成 D 12月末で100%内定に達していない		C、Dの場合、次年度の取り組みを再検討	年度末に集計
	② 各種資格・検定試験に取り組み挑戦することが進路実現に繋がることを様々な機会を通して喚起する。	各教科 学年 進路指導	昨年度、各種資格・検定試験を取得・合格した生徒は延べ632人（R3年度729人）であった。	【成果指標】（生徒） 各種資格・検定試験に多くの生徒が挑戦し、取得・合格数を増やす。	新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数が A 900人以上であった B 850人以上～900人未満であった C 800人以上～850人未満であった D 800人未満であった		C、Dの場合、次年度の取り組みを再検討	年度末に集計
	③ 保護者や関係機関と連携を深め、進路指導の充実を図る。	進路指導 学年	提供された情報に対して満足している保護者は多い。さらに、進路に関する情報を、適切に発信していく必要がある。	【満足度指標】（保護者） 進路について、必要な情報が提供されている。	提供された情報に対して A 満足できた B ある程度満足できた C あまり満足できなかった D 満足できなかった	A+Bの合計は92.1%で、前年度と同程度である。今後も各学年だよりやその時期に応じた進路に関する最新の資料をクラスルームを活用しながら、情報の提供を工夫して行う。また、引き続き保護者との連絡を密にし、生徒の進路実現を目指したい。	A+Bの合計が90%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	分析（成果と課題）	判定基準	備考
4 学校の活性化のため、部活動や地域ボランティアの活性化を図るとともに、学校の魅力を発信する取組を充実させる。	① 生徒が部活動に対し、満足感や達成感を感じ主体的に取り組むことができるよう支援・運営する。	特活 全職員	令和4年度の部活動加入率は78%、部活動により満足感や達成感を持っている生徒は77%であった。生徒が部活動に対し、より主体的に取り組めるような指導上の工夫が求められる。	【成果指標】（生徒） 部活動への加入率を高め、充実した高校生活になるよう支援する。	部活動への加入率が A 90%以上である B 85%以上～90%未満である C 80%以上～85%未満である D 80%未満である	前期の結果は78.9%（517人中408人が加入、重複あり）であった。新入生の加入率は78.3%、2年次91.2%、3年次65.5%と3年次生の無所属の割合が多い。部活動を続けることの大切さや、加入することのメリットを再度伝えていく必要がある。	85%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	5月、10月に調査
				【満足度指標】（生徒） 生徒が部活動に主体的に取り組む切磋琢磨することを通して、豊かな人間関係を築き、達成感を得る。	部活動に対し満足感・達成感を感じている生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上～80%未満である C 60%以上～70%未満である D 60%未満である	昨年度はコロナ禍で学校の部活動期間や大会実施に制約を設けていたが、今年度はコロナが第5類に移行し、活動の制約もほぼ以前に戻った。部活動の満足度や達成感を感じている生徒は75.3%となり、昨年度と同様に高い水準である。今後も部活動の魅力を発信して、加入率を高めていく。	70%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	② 地域行事・学校行事等に参加し、地域との連携を密にする。	特活	令和4年度はコロナ禍にも関わらず、ボランティア活動等に参加した生徒数は増加した。時期を見定め活動を継続する。	【成果指標】（生徒） 地域の清掃活動や行事、ボランティア等に参加する。（「北陵アバンテ」を含める）	休日も含めて年1回以上参加した生徒が A 400人以上であった B 300人以上～400人未満であった C 200人以上～300人未満であった D 200人未満であった	前期の結果はのべ67名であった。内訳は地域ボランティア（東原町）参加のべ51名とサマーボランティア3名、森本駅前広場でのボランティア13名。後期には「北陵アバンテ」「金沢マラソン」等、参加できるボランティア活動を実施する予定である。	C、Dの場合、 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
				【満足度指標】（保護者） 保護者が本校の教育活動全般を理解し、満足している。	本校の教育活動を理解し満足している保護者が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	前期の結果は87.5%であった。R1年度から80%を超えるも横ばいが続いており、おおむね満足度は高い。今後さらに本校の教育活動を理解してもらおうための様々な取り組みを実施し、満足度を得られるよう努力する。	C、Dの場合、 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	③ 信頼される学校づくりに努める。	総務 学年 生徒指導 保健相談	令和4年度「満足している」保護者は90%であった。より多くの方々に理解を頂けるよう、家庭と学校が一体となった学校づくりに努めていく。	【成果指標】（保護者） 保護者が本校の教育活動全般を理解し、満足している。	本校の教育活動を理解し満足している保護者が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	前期の結果は87.5%であった。R1年度から80%を超えるも横ばいが続いており、おおむね満足度は高い。今後さらに本校の教育活動を理解してもらおうための様々な取り組みを実施し、満足度を得られるよう努力する。	C、Dの場合、 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
				【成果指標】（教員） 本校の特色や生徒の活動が、ホームページなどで積極的に発信されている。	発信していると教員の割合が A 95%以上 B 85%以上95%未満 C 75%以上85%未満 D 75%未満	前期の結果はA判定。H30年度以降96%以上の数値である。情報発信の効果と意義が教員全体に意識されている現れである。今後も積極的な学校生活、部活動などの情報を発信していく。	C、Dの場合、 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
5 働き方改革における教員の意識改革と行動改革を進めるとともに、業務のスクラップ&ビルドと平準化に取り組む。	① 月間や週間目標を設定し、それぞれが計画的に業務を進める。	全職員	令和4年度の時間外勤務は微増した。引き続き時間外勤務の縮減、業務のスクラップ&ビルドと平準化を進める必要がある。	【成果指標】（教員） 勤務時間調査における月別の時間外平均が、前年度同月を下回っている。	時間外平均が、前年度同期より、 A 前年度より減少している B 前年度と同等または増加している	今年度4～7月の時間外月平均は2453.2分であった。昨年度の同期間の時間外平均が2777.9分であり、324.7分減少している。さらに勤務時間を意識した効率的な業務遂行とスクラップ&ビルドを含めた業務改善を進めていく。	Bの場合、 次年度の取り組みを再検討	毎月調査